

Graciela Suserana

76/45

SIDE・A

1. アドロ ADORO

穂まどか訳詩/A. Manzanero作曲

2. 時計 EL REL OJ

かもまさる訳詩/R. Cantora作曲

3. サバの女王 LA REINE DE SABA

なかにし礼訳詩/M. Laurent作曲

4. 誰れもない海

山口洋子作詩/内藤法美作曲

■歌/グラシェラ・スサーナ ■演奏/新音楽協会 ■編曲/山木幸三郎

SIDE・B

1. 粹な別れ

浜口庫之助作詩・作曲

2. カミニート CAMINITO

Juan de Dics Filiberto-Gabino Coria Penaloza

3. ラ・クンパルシータ LA CUMPARSITA

Geraldo Hernan Matos Rodriguez

4. 君しのぶ夜 MIS NOCHES SIN TI

Maria Teresa Marquez

■歌ギター/グラシェラ・スサーナ(1.4 ギター弾き語り) ■ギター/オスワルド・アベナ(1.3.4)
■演奏/新音楽協会(2) ■編曲/山木幸三郎(1.3.4) 平野行男(2)

■レコード製作にあたって

日頃は、第一家庭電器をご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。

ご好評をいただいている DAM オリジナル・オーディオチェック・レコードも四年目に入り、このアルバムが15種類目となります。

さて、今回は“日本人より日本の心を情感をこめて歌いあげる”ということで評判のグラシェラ・スサーナの登場です。彼女は「アドロ・サバの女王」(東芝EMI・ETP-72045)の100万枚を超える大ヒットでその人気を不動のものとしたが、そのレコードはオーディオ・チェックレコードなどというものが発売される以前から、音の良さ、チェックのしやすさでオーディオ・マニアやメーカーの間で話題になっていました。

そこで折から来日中のスサーナを、最新の録音技術でDAMがオリジナル録音したのがこのアルバムです。

曲目は、彼女の数あるレパートリーの中から、特に評判の高いものを集め、バラエティに富んだ構成になっています。

録音方法には、ミス等を補正できるスタジオ録音と、音楽的な雰囲気と流れがスムーズなコンサート・ライブ録音があり、DAMオリジナル録音は、それぞれの良い点を生かすために、ホールを使ってスタジオ録音風に収録いたしました。そして3月24日、赤坂・都市センター・ホールにおける録音は、スサーナやバックのミュージシャン、録音スタッフは勿論、満員のお客様も一体となって、緊張し

た雰囲気の中で素晴らしい演奏が展開されたのです。当日は、ボーカルとバックは同時録音とし、曲によって、2回演奏したものもありますが、レコード化にあたっては、曲間の編集を一切行わず、音楽の自然な流れを重視いたしました。

今回は従来の76 cm/sec 45 回転、厚手プレス盤に加え、クォーツ・ロック D.D. タイヤ針カッティングによる、現在考えられる最新・最高水準の技術により、スサーナの情感の世界をあますところなく再現できるよう努力いたしました。

スサーナの低音から高音までの音域の広さ、独特のささやきから力強いフォルティッシモまでの驚異的なダイナミックレンジ、弦

や各種打楽器、バンドネオンを含む編成の大きなバック、それにアベナさんの弾くアコースティック・ギターの冴え等、オーディオ・チェック・ポイントも大変バラエティーに富んでおります。

なお、このアルバムの制作にあたり、関係各位の皆様に多大なご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

最後に、会員の皆様のレコード・ライブラリーに、又オーディオ・チェックに末長くご愛用いただきますようお願い申し上げます。

DAM 推進委員会



■スサーナ紹介

●グラシェラ・スサーナ（本名グラシェラ・スサーナ・アンブロシオ・デ・ベドゥイーノ）は、1953年1月22日アルゼンチンの首都ブエノスアイレスのビジャ・クレスポに生れ、

●1959年 6歳のスサーナはギターをケロ・パラシオス（アルゼンチン・フォルクローレ界の重鎮）とアルノルド・ピント、声楽をアルバ・デベリオン夫人に習う。

●1963年 10歳のスサーナは歌にもギターにも豊かな天分を示した。

●1967年 偉大な女性歌手マルガリータ・パラシオスのグループに2歳年上の姉クリスティーナと共に加わり、そこで知りあったウーゴ・ロペスと共に「トリオ・ロス・カウティーボス」を組み、注目を集める。その後クリスティーナがウーゴと結婚しデュオ（二重唱）を組んだため、ス

サーナはステージから離れる。アルゼンチンのコルドバ州コスキン市で開かれたフォルクローレフェスティバルで、「クリスティーナとウーゴ」が熱狂的な喝采をうけてスターの座についたこの年、おなじコルドバ州のラファルダ市で開かれたタンゴ・フェスティバルに出場したスサーナは、最優秀新人賞を獲得、「世紀は永遠のタンゴへの若々しい芽グラシェラ・スサーナを世に送り出した」と満場の聴衆や審査員からあたたかい賞讃の言葉を贈られる。

ラファルダのタンゴ・フェスティバル以後、カルロス・ガルシア六重奏団をバックに有名なタンゴ・クラブ「エル・ビエホ・アルマセン」にプロ・シンガーとしてデビュー。TV、ラジオにも多数出演、ひとびとに知られはじめる。

●1970年

●1971年

南米旅行中の菅原洋一氏と「エル・ビエホ・アルマセン」で運命的めぐり逢い。「アルゼンチンでもっとも感動した歌手……」と菅原氏に気に入られ、その年の暮れ招かれて「菅原洋一リサイタル」にゲスト出演。そこで歌った日本語の歌の感情移入がすばらしく、急遽録音されたのが、「サバの女王」「粹な別れ」が収められたファースト・アルバム「愛の音／グラシェラ・スサーナ」です。

●1973年

発売後六年目に入り、今なおLPチャートにあるセカンド・アルバム「アドロ／サバの女王」を録音、日本におけるスターとしての第一歩を踏み出す。

●1974年以後 毎年2月前後に来日、着実に知名度をあげ、1979年1月までに日本語による歌唱、母国語スペイン語による歌唱をあわせて19枚のLPを発表。現在売上げ

総枚数約250万枚を突破。初来日以後のコンサート総数約320回。いずれも外国人アーティストによる最高記録。

●1977年

アルゼンチンのビデラ大統領より、この年もっとも活躍した各界の若手芸術家13人と共に表彰さる。

●1978年12月 「黄金のガルデル賞（歌手に対するアルゼンチン音楽界最高の栄誉賞）」を受賞。

●1978年12月18日 大歌手の道を歩みはじめたグラシェラ・スサーナは、もうひとりのギターの師オスバルド・アベナを伴って8度目の来日を果し、約40回のコンサートで歌う。

●1979年3月 第一家庭電器DAM45のための公開録音（都市センター・ホール）。スサーナ最新映画音楽スタジオ録音。

■コンサートに立ち合って

オーディオ評論家 小林 貢

私は、グラシェラ・スサーナという、すぐに“アドロ”を思い出します。というのはプロユース・シリーズの“フィメール・ボーカル”に、この曲が収められていて、2、3年前には雑誌のヒアリング・テストの時にずい分お世話になっていたからです。従って、おそらく多くのオーディオ・ファンの人達にもかなりおなじみなのではないかと思えます。

そのグラシェラ・スサーナがDAMオリジナル・レコーディングとしては、初登場。それも、ちょっと趣向を凝らした登場なのです。

レコーディング・データを見ると赤坂都市センター・ホールでのレコーディングとなっているので、ライブ録音とお思いでしょうが、それが違うのです。

毎回新たな企画で意欲的にレコード創りをしているDAMが、今回は、一般の人達がめったに見ることの出来ないレコーディング風景を皆様にお見せしようということで、この日のタイトルは“グラシェラ・スサーナ・レコーディング・オン・ステージ”。これは、レコーディングを舞台の上で行ない、それを客席で見学してもらうという意味で、いわば公開録音だったのです。

だから、会場の入口でもらったパンフレットには“お客様へのお願い”として次の様な

事柄が印刷されていました。

1. 本日は、公開録音の為、通常のコンサートとは違い、進行状況がその都度変化する場合がありますので、司会者の進行、ご案内にご協力下さいませ、お願い致します。
2. 本日は、レコーディングも一緒に行なっていますので、本番中係員の指示以外では拍手などはやめていただく様、お願い致します。(実際は、OKサインがでたあと拍手をすることになりました。)
3. 本日はレコーディングですので同じ曲を2度歌うこともありますので、ご了承下さい。

これによって、聴いていただければ、おわかりと思いますが、ホール録音にもかかわらず場内ノイズのほとんどない、スタジオ録音なみのクリアなサウンドが得られた訳です。

しかし、これはレコーディング重視であり、せっかく、雨の中を聴きにこられた人達に気の毒なのではないか、など思ったのですが、逆に皆、好意的にこの企画に協力していたし、そればかりでなく、この新しい体験にかなり満足した様子でした。というのは、私達はレコーディングの時、今度のテイクはうまく行かなといつも緊張してモニター・ルームに居る訳で、おそらく当日のお客様も一曲一曲

そんな気持ちで聴いていただろうし、皆自分がディレクターになったみたいな気分も味わえた事と思う。従って、普通のコンサートよりもはるかに密度の濃い聴き方になり、その上、N.Gが出て2回も聴けた曲もあるからです。

そんな客席の雰囲気はというと、スサーナが歌っている間の息をつめた様子で歌い終ってO.K.の合図が出た後のホッとした様子がはっきりと伝わって来るのでした。

音にはなっていない、そんな雰囲気が、このレコードから感じられたとしたら、貴方の装置は相当グレードが高いと云えるのではないのでしょうか？

当日のプログラムは、トワ・エ・モアが歌っておなじみの“誰もいない海”で始まり、“アドロ”“サバの女王”“ラ・クンパルシータ”などを含めた、11曲でしたが、その内5曲にN.G.が出て2回聴けたことになりました。しかし、私の聴いた限りでは、グラシェラ・スサーナは調子が良い様でしたので、N.G.の原因は他にあったのではないかと考えています。

結局このアルバムには“アドロ”、“時計”、“サバの女王”、“誰もいない海”、“粹な別れ”、“カミニート”、“ラ・クンパルシータ”、“君しのふ夜”の8曲が収められていますが、

その全部が素晴らしい出来映えで、既発売のレコードと比べても勝るとも劣らない作品であると思います。

このレコードでの聴きどころは、“天使の歌声”といわれるスサーナの声はもちろんですが、ストリングスのハーモニー感、パーカッションの定位と立ち上り、それから、スサーナ自身の弾くガット・ギターと彼女の師匠であるオスワルド・アベナのガット・ギターの質感の差という点などが、明確に聴き取れるかどうか挙げられます。また、もっと細かなところではスサーナの歌で、子音の出方がナチュラルであるか、不自然に強調されるかという点でもコンポーネントのチェックが出来るのではないかと思います。貴方の装置を十分にチェックした上で、彼女の素晴らしい歌声を心ゆくまで楽しんでいただきたいと思います。

それにしても、この企画、参加したミュージシャンや録音関係のスタッフの人々にとってはかなり、ハードなものだったといえるでしょう。ご苦労様でした。

次々に斬新な企画と制作で私達を楽しませてくれる、このDAMオリジナル・レコードの次回作に早くも期待しているのは私だけではないでしょう。

■録音に立ち合って

（株）タムコ 久保正義

オーディオ・ファン、音楽ファンには、もう、すっかりおなじみとなった、第一家庭電器DAM 76/45、オーディオチェックレコード群に、又魅力の一枚が、加わった。

きらめくボーカルサウンドの今回は、グラシェラ・スサーナである。

G.スサーナは今年で来日8回目を数え、いつも安定した歌唱と、かわらない優しさが、日本の大人のカップルの間に、特に人気がある事は、すでに御承知の事と思う。

さて、本レコード制作にあたったスタッフは、これまで発売されたスサーナのレコードを、ずっと担当して居られる、東芝EMIの、平形プロデューサー、渡部ミクサーの、息の合ったコンビである。

今回は、スタジオレコーディングとは、全く条件の違う場所での、レコーディング・オン・ステージ、と言う事から、次の様な事柄について、特に検討がなされた。

1). 客へのPAは、ハイクオリティであり、且つレコーディングに悪影響を及ぼさない

様、配慮する。

- 2). スサーナへのフォールド・バックの方法(HEAD PHONE〔以下HPと略〕あるいはステージモニタースピーカーによる)
- 3). バックミュージシャンへのフォールド・バック(弦は片耳式HP、リズムセクション管は両耳式HPとした)

この3点はライブ・レコーディングの時、ボーカルマイク、楽器マイクへのPAのまわり込み、カブリを、最小限に抑えるため最も重要である。

- 4). オーディオ・チェック・レコードとして完成を想定した時、ホールにおける、公開録音であると言う以外、全てスタジオ・ライブと、同様の音場空間をつくり、一曲一曲を独立したものとする。

- 5). 拍手、歓声は入れない……。

マイクアレンジは別図の通りであるが、選択にあたり、ミクサーの渡部氏は、PAとの兼あいの中で可能な限り、スタジオ録音と同様な、マイクロフォンを選び、現場では、音源

にできるだけマイクロフォン本体を近づける、ON MIC settingをした。

ここで特筆すべき事は、渡部氏独自の、サウンドポリシーから、G.スサーナの声に合う、Vocal用マイクとして、ショップスCMT-54Uを用いている事である。

レコーディングスタッフ16名は機械と共に11時に都市センターホールに入り、セッティングを開始…13時セットアップ打合せに入る。14:30 G.スサーナ、ミュージシャン、ホール入り。

15:00 リハーサル開始。

G.スサーナの第一声がモニタースピーカー、JBL4320から出ると、平形プロデューサーは開口一番今日のスサーナはいい……。

いけるぞ！……と。

プロシニングと言えども、いつもベストコンディションであるとは限らないので、今回の様なライブレコーディングの日のコンディションを制作スタッフは心配していたわけである。

編曲指揮の山木氏のもと、滞りなく、リハーサルが終り、最終チェックをする。

MCI、JH-16、マルチTape Recorderは、76cm/secに調整されスタートキューを待つ。

本番前、お客様には司会者よりレコーディング・オン・ステージである事をお願いがあり、水を打った様に静かで、しかも熱い緊張の中、レコーディングがスタートした。

一曲目、誰もいない海……演奏が終り、ポーズが有って客席から一斉に吐息が洩れる。

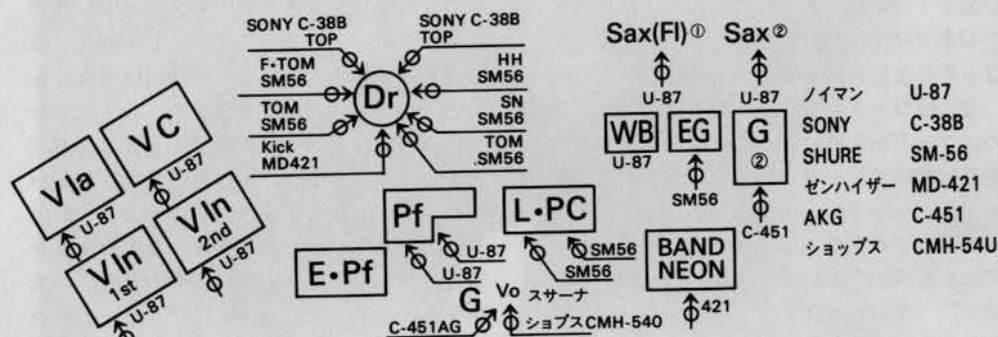
録音中継車の平形プロデューサーより、TAKE ONEでOKの指示が出ると同時に、場内大拍手となった……。

この様にして、一曲一曲熱い緊張感の中で、しかも丁寧に録音されたテープは、四月上旬東芝EMIトラックダウンルームでミックスダウンされ、DAM 76/45レコードとして完成したが、当日会場にお見えになった方はあの緊張感をもう一度……。

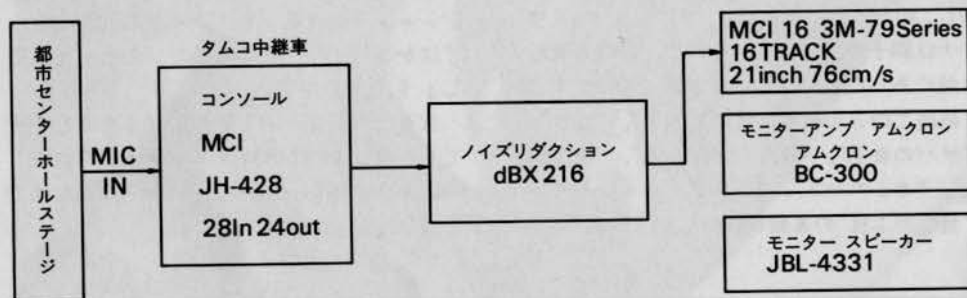
当夜のG.スサーナの絶妙ののりを最高にお楽しみいただける事と思う。

■オーケストラ、楽器編成

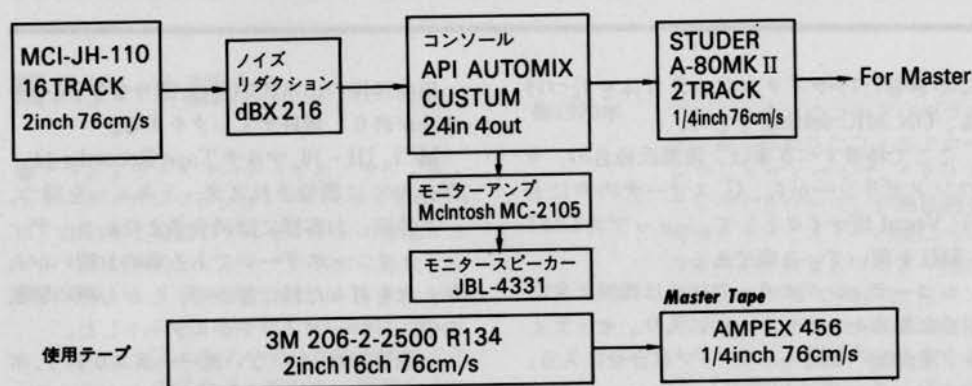
アドロ	Vln⑧, Vla②, G, EG, PC(カバサ, タンバリン) Epf, Fl, Dm	粋な別れ	アコースティックG②
時計	Vln⑧, Vla②, Vc②, G, EG, Epf, S Sax②, Fl, Lpc, Dm	カミニート	Vln⑧, Vla②, Vc②, EG, WB, G, Band Neon, Pc, Fl②, Pf
サバの女王	Vln⑧, Vla②, Vc②, EG②, EB Fl②, Pc, Pf, Dm	ラ・クンパルシータ	G, Band Neon
誰れもない海	Vln⑧, Vla②, Vc②, G, EG, Pf, EB, Dm, Lpc, Fl②	君しのふ夜	G②



■ブロック・ダイアグラム 昭和54年3月24日都市センターホール



■トラックダウン 昭和54年4月9日東芝EMIトラックダウンルーム



■メンバー紹介

EG	宇山 恭平	SAX	鈴木 正男	Vln(top)	藤原 節生
//	金成 良悟	Vln(top)	藤沢 一彦		小林 陽一郎
EB	小泉 仁美雄		川島 正雄	Vla	林 昌一
Dm	鈴木 正夫		河村 昭夫	Vc	遠山 克彦
Pf	大原 繁仁		多田 吉徳		藤沢 俊樹
ラテンPC	川原 正美		中山 言成		田中 進
SAX	市原 宏祐		井後 勝彦	バンドネオン	京谷 弘司

■クォーツ・ロック、厚手レコードについて

〔厚手レコードについて〕

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ第、大幅に飛躍しています。振幅(P-P) 250μ~280μ, [L-R], ピーク・レベル+20 dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかすのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実レーシングはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩化成形性が良いとされ、超薄形レコードが話題となりましたが、その一方、レコードの厚さ(質量)がもたらす音質への影響について、再生時の問題を含んだトータル・サウンドとして研究されてきた経過があります。厚手レコードの持つ音質上の優秀性に着眼した当社では、今までの各種データを基に、材料開発、プレス技術をも含めたプロジェクト・チームをつくり、厳しい条件下でヒヤリング測定をはじめとした各種テストを繰り返し、遂に音質バランスがラッカー・マスターに近いトーン・キャラクターをもつレコードを、ここに提供することが出来ました。レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれました。

〔クォーツ・ロックD.D. モーターについて〕

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロック・D.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクオリティを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディープスがコントロールされるようになりました。

リアリティの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

レコード材質及び製造プロセスについては、東芝EMIプロフェッショナル、レコード仕様と同様現時点最高の製造技術を導入して品質の安定化を図っております。尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ビリッキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

●カッティング・データ

Cutting: TOSHIBA-EMI L.T.D. Gotenba

Cutting Date: May 9, 1979

Tape Recorder: Studer A-80MK II

Drive Amplifier: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-70

Denon Quartz Rock Motar

Cutting Head: Neumann SX-79

Diamond Cutting Stylus

指揮・編曲	山本幸三郎
プロデューサー	平形忠司
	小山正敏
ディレクター	白村知英
ミキサー	渡部喜久
サウンド・エンジニア	久保正義
テクニカル・エンジニア	原 清介
カッティング・エンジニア	岡崎好雄
メンテナンス	松原 一
ジャケット	東芝EMI(株)デザイン室
カメラ	石田雄作
録音場所	赤坂都市センターホール
	S.54.3.24
制作協力	小沢音楽事務所
	グローバル・レコード
録音協力	株式会社 タムコ
企画	第一家庭電器 DAM
製造	東芝EMI株式会社

■ 曲目紹介

● アドロ

サバの女王と同年に登場した、メキシコのA・マンサネーロの作品です。この曲が発売された時は、まだヒットのきざしがなく、だれもが知っている曲というにはちょっと無理であったが不思議と外国のオーケストラが取り入れて演奏を続けていました。これが今流行でもある、TV「光る海」の主題歌になり大ヒットをしました。TVの主題歌は、F・プウルセル、グランド・オーケストラでしたがこのスサーナの「アドロ」は各アーティストの演奏したどのレコードにも負けない、大ヒットとなりました。

● 時計

R・カントラルの作曲で訳詩はかもまさるさんでヒットした曲です。「私達のために今の時間をそのままにして下さい」というような愛のうたです。日本の曲の様な感じもする、好みやすさと、名訳の効果がG・スサーナによって更にムードを盛り上げています。

● サバの女王

又の名をシバの女王とも呼ばれ、シバの女王とソロモン王の愛をテーマにした曲です。原曲はミッシェル・ローランの作品で美しい旋律とダイナミックな演奏で、各ポピュラー、オーケストラが、きそってレコード化しているスタンダード・ナンバーです。その中でもG・スサーナの哀愁をこめたうたが皆の心をいとめました。それによって、彼女は日本のトップ・スターとなった名曲でもあるのです。

● 誰もいない海

山口洋子作詩、内藤法美作曲のこの曲は、越路吹雪やトワ・エ・モア等のスターが好んで歌いました。静かな情感があふれるこの曲を歌うだれもが自分に陶醉してしまう様な不思議な魅力を持った曲で今では、スタンダード・ナンバーとして歌に演奏、ステージ等に取り上げられています。

● 粋な別れ

「僕は泣いちゃった」、「黄色いサクランボ」、「バラが咲いた」等の大ヒットメーカーの浜庫さんこと浜口庫之助氏の作品です。オリジナル曲は石原裕次郎の歌った曲ですが、ムードあるモダンなこの曲は、各歌手がきそって歌っているものでどれがオリジナルなのかかわからない程、固定されることのない、各自の個性が出せる作品です。特にこのスサーナの歌とギター、スサーナの先生であるアベナさんのギターとのアンサンブルは聴く人の心をとりにしてしまいそうです。

● カミニート

ガビーノ・コリア・ペニャローサが作詩し、ファン・デ・ディオス・フィリベルトが作曲。タンゴの曲にしては美しい抒情的な男女の愛をうたった曲で、哀愁のあるこのメロディーは誰れもが心の中で一度は聴いたことのあるような愛の幻想曲のようで、この曲程バンドネオンが演出効果を盛り上げている名曲はそうはないでしょう。1923年の作品。

● ラ・クンパルシータ

1914年ヘラルド・エルナン・マトス・ロドリゲスの作品。今さら説明のいらぬタンゴの代表作でロドリゲスが学生時代に作曲した作品であるとか…余りにも古いためその辺は不詳ですがアルゼンチンタンゴと言えばこの曲とあまりにも有名な曲で、演奏家なら誰れでもこの曲を一度は演奏をしていることでしょう。これも愛をうたった曲です。

● 君しのぶ夜

マリア・テレサ・マルケスとディメトリオ・オルティスの作品で南米パラグアイの曲というめずらしいものです。美しく、せつない、愛をうたったこの曲はアルゼンチンの天使G・スサーナのこのLPの最後を飾るのにふさわしい出来ばえと言えるのでは、ないでしょうか。

ゲスト

オスワルド・アベナさん（ギター）

アルゼンチン出身でフォルクローレのギターでは世界でも5本の指に入る程の大先生です。今回のG・スサーナのコンサートでは、素晴らしいギターの音色を聴かせて下さいました。